



東九州支部報



リレー登山最終日鶴見岳山頂にて(8月23日)

別府湾を取り巻く山々をひとつのルートとしてリレーでつなぐ「別府湾リレー登山」が、八月二三日(日)正午鶴見岳山頂に、一週間にわたり二班に分かれて実施したリレーの最終日の参加者が合流して無事終了した。

この取り組みは四月二五日に開かれた本年度の支部定期総会で決定されたもので、別府湾を取り巻く山々の稜線を、その両端の海岸から支部員がリレーでつないで完歩しようという構想である。総会後七月八日に打合せ会を開き、たどるコースやリレー実施のためのルート工作の分担などについて具体化するとともに、そのイベントを「別府湾リレー登山」と名づけて取り組むこととなった。

リレーの実施に当たっては、ルートがほぼ完全に開かれていた十文字原から鶴見岳を経て小鹿山までの間を除いては、ほとんどのルートが不鮮明であるため、七月から各会員で手分けして全コースにわたって事前に査査し、必要なルート工作を行うこととなった。

具体的なコースは国東半島の北端、亀崎から佐賀関半島の東端、関崎までの、阿半島の背骨に当たる稜線と、大分市、別府市の背後にある山並みの稜線をつないだもので、途中通過する主な地点やピーク、峠は伊見、鷺ノ巣山、千灯岳、金ヶ峠、文殊山、犬鼻峠、阿子山、走水峠、波多方山、横岳、田原山、鋸山、

別府湾リレー登山 鶴見岳山頂でフィナーレ

《 もくじ 》

別府湾リレー登山	
鶴見岳山頂でフィナーレ	1
小鹿山から鶴見岳へ	3
十文字原から鶴見岳へ	4
無風 快晴 4°C	5
扇山と祇園山へ	6
渡神岳外二山	6
貫山と足立山へ	7
齊藤会長が来県	
傾山へ	7
第15回全国支部	
懇談会報告	8
セピア色の秘境	9
お知らせ	10
後記	10

甲尾山、百合野山、鹿鳴越東、七ツ石山、鹿鳴越西、経塚山、尼蔵岳、南畑、十文字原、伽藍岳、内山、鞍力戸、鶴見岳、志高湖、小鹿山、鳥越峠、高崎山、賀来、塚野、霊山、本宮山、黒仁田、大南大橋、鶴ヶ城、夜明ヶ城、九六位山、九六位峠、再進峠、白山、御所峠、樺木山、城山、行者原、関、遠見山などである。これは水平距離にして約一六〇キロメートルで、二万

登山ルートを開拓へ

123日に1本に

別府湾を取り巻く山々を数珠つなぎ

日本山岳会東九州支部

社団法人日本山岳会東九州支部(梅本秀徳支部長)は、別府湾を取り巻く山々をひとつのルートで結ぶ「別府湾リレー登山」に取り組んでいる。登山道のない山も多く、七、八月にか



コースを検討する日本山岳会東九州支部のメンバー

五千分の一の地図をつなぐと一八枚にわたるものとなった。ルート工作については、担当する区間とその責任者が次のように決められた。

国東半島コース
 △亀崎〜鷺ノ巣山：(興田)▽鷺ノ巣山〜両子山：(梅木)▽両子山〜甲尾山：(飯田)▽甲尾山〜百合野山：(加藤)▽百合野山〜十文字原：(星子)▽佐賀関半島コース

△関崎〜行者原：(野村、西(あずさ))▽行者原〜樺ノ木山：(姫野)▽樺ノ木山〜御所峠：(吉田)▽御所峠〜鶴ヶ城峠：(木本)▽鶴ヶ城峠〜霊山：(阿南、西(孝))▽霊山〜廻栖野：(安東)▽廻栖野〜鳥越：(佐藤(正))▽鳥越〜小鹿：(安藤(幹))

各責任者は、七月から八月上旬までの期間に参加できる会員を誘ってルートを審査し、目印

三日正午に中間点の鶴見岳山頂で合流、ルートの完成を祝う。

同支部ではこれまで、登山活動のほか、人気や歴史のある県内百カ所の山を「大分百山」として選定。ガイドブックを出版して登山愛好家に紹介してきた。今回、新たな取り組みとして、別府湾を取り巻く登山ルートをつくり、広く紹介していくことにした。

ルートは、国見町鶴崎から佐賀関町関崎まで、水平距離百五十六キロのコース。国東半島の両子山や横岳、大分市の高崎山、霊山、九六位山などをたどる(ただし道路も一部利用)。中間点の鶴見岳周辺は登山道が整備されているが、道がない場所も多く、メンバーがルートをくわつてくる。その際、極力自然にダメージを与えないため、カメラやたき切り開くのはやめ、ルート上には布やテープで目印をつけている。

八月中旬までにルート工作を終え、メンバーは十七日から一週間かけて、国見と佐賀関からコースをつなぎ、鶴見岳山頂を目指す。完成すれば目印の布やテープをたよりに歩くことになるが、地図を読む力も必要。一部では、やぶをかき分けながらの登山になる。同支部では「別府湾を望めるコースとして登山者が訪れるようになれば」と話している。

大分合同新聞
八月九日(朝刊)

延べ約一〇〇名のこのイベントのフィナーレを飾った。

◎リレー登山参加者

国東半島コース
 △一七日(月) 亀崎〜千灯：西(孝)、佐藤、清水 △一八日(火) 千灯〜犬鼻峠：西、石川 △一九日(水) 犬鼻峠〜走水峠：西、海田、田口 △二〇日(木) 走水峠〜鮎返：飯田 △二一日(金) 鮎返〜鹿鳴越東：飯田、渡部 △二二日(土) 鹿鳴越東〜十文字原：星子 △二三日(日) 十文字原〜鶴見岳：星子、飯田、安東、渡部、継松、阿部、西、池辺、児玉、松井

佐賀関半島コース
 △一七日(月) 関崎〜樺ノ木山：安藤夫妻、梅木、加藤、木本(礼) 児玉、西(あ) △一八日(火) 樺ノ木山〜再進峠：吉田 △一九日(水) 再進峠〜峠：木本(礼)、木本(義) △二〇日(木) 峠〜米良：加藤、太田 △二一日(金) 米良〜国府：西(孝)、西(あ)、継松、中尾、林 △二二日(土) 国府〜小鹿山：木本(淳)、安部、田口 △二三日(日) 小鹿山〜鶴見岳：野村、安部、石川、甲斐

(良) (隆)、加藤、木本(淳)、木本(義)、木本(礼)、白石、菅、田口、橋本、林、松村

(編集局)

1週間かけ別府湾ぐるり

リレー登山スタート

日本山岳会東九州支部による別府湾岸リレー登山が十七日始まり、早朝に南北両コースが佐賀関町関崎、国見町亀崎からそれぞれスタートした。

南コースは安藤幹・セツ夫妻ら四会員が午前六時すぎに支援する会員らに見送られて関崎灯台から出発、遠見山を皮切りに同日は城山から樅木山まで、佐賀関半島の背骨にあたる尾根を、北コースは西孝子さん、佐藤正八さんら四会員が国東半島の北端海岸から歩き

始め、初日は鷲巢岳の長い尾根を登ったあと千灯岳へ。この後、南コースは白山から九六位山とたどって、本宮山、霊山、高崎山、小



関崎・海星館付近を歩く南コースの会員たち

部から鉾山、さらには鹿鳴越の連山を縦走して十文字原へ。同支部の会員約六十人が一週間かけて別府湾岸から望める山々をつなぎ、二十三日正午ごろ、鶴見岳の山頂で合流する。

分水嶺(れい)とよめる尾根を縦走するルートが多いため、既存のはっきりした登山道を歩けるのはコースの半分くらい。やぶを分け、ルートを開きながら進むことになり、既に今月初めから手分けして下見、ルートづくりがかなりの部分で行われており、支部では「暑さとの戦いになるが、成功は間違いない」とみている。

リレー最終日の山行報告 I

小鹿山から鶴見岳へ

野村芳雄

曇り後晴、午後雷雨。別府湾リレー登山最終日目的地である鶴見岳山頂に全員が結集する日



〇「別府湾リレー登山」に十七日からチャレンジしていた日本山岳会東九州支部(梅木秀徳支部長)の十三文字原、小鹿の二カ所から鶴見岳山頂を目指し、午前五時半にスタート。同十一時ごろに山頂に到達した。山頂に集まった約五十人の会員は、一人ひとり達成の感想を話し合ったり、記念写真を撮っていた。

〇「リレー登山」では、国見町亀崎から佐賀関町関崎までの水平距離百五十七キロのコースをたどった。国東半島の阿子山や横岳、大分市の高崎山、霊山、九六位山などでルートを開き、目印を付けながらたどった。参加した大分市の西孝子さん(左)は「大変だったが楽しかった」と感想。

〇「別府湾リレー登山」に十七日からチャレンジしていた日本山岳会東九州支部(梅木秀徳支部長)の十三文字原、小鹿の二カ所から鶴見岳山頂を目指し、午前五時半にスタート。同十一時ごろに山頂に到達した。山頂に集まった約五十人の会員は、一人ひとり達成の感想を話し合ったり、記念写真を撮っていた。

である。朝から曇天ではあるがやがて晴そうな空模様。関崎グリーブの最終ルートは小鹿山から鶴見岳で、これが一週間にわたる別府湾リレー登山は終了する。

午前七時、約束の集合場所である別府市立少年自然の家「おじか」に車数台が集合、ここからの出発は総勢七名となる。小鹿山の登りに朝の汗をかき五分で山頂着。山頂はかなり整

備され展望もよくなっている。ロボット雨量計のアンテナあり、そばの温度計は二三度を示しており今日も暑くなりそうである。三等三角点あり。

これより志高湖、神楽女湖方面を示す標識に従い北に向かう。よく切り分けられた道を下る。周囲はカヤと灌木に遮られ遠くの展望は全くないが広い明るい尾根筋はそんなに悪い気分ではない。ルート作時に付けられた赤いテープもまだ真新しい。所々カヤの中に秋の草花も見られほっとする。

船原山方面へはカヤが高く茂り通過できないという三浦氏(別府)の助言に従い志高湖に向かう防火帯を下ることにする。途中ルートを早く左に取りすぎ神楽女湖の駐車場に出てしまっただがそのまま歩道を歩く。途中から志高湖への標識に従い再び舗装された山道に入り、八時ちようど志高湖畔の歩道に出る。湖畔には驚くほどのテント村が出来上がっており、夏休みも終わりに近いせいかわ家族連れがキャンプを楽しんでいる。

志高湖より車道を鳥居まで三〇分、八時三〇分に鳥居着、ここから菅氏合流、小休止をとる。石段を登り一部車道を通り、鶴見神社駐車場へ、ここで木本氏ら四名が合流一四名となる。九時神社着、湿った滑りやすい石段を一分ほどで「霊水」の出る場所に到着、周囲には立派

な杉、ブナの大木ありいかにも神社の境内といった感じ、こゝでしばし汗を拭き冷たい正に霊水を心いくまで飲み水筒に詰め

る。いよいよこれより鶴見岳の登りにかかる。登山道は「鶴見岳一気登山」道であり、松の植林の中は割と歩きやすい。最初の急坂を上り詰め小休止、市街地に近い山にしては静かで、思ったよりも山中の感じがする。かなり育った杉の植林帯を抜けると樹林帯に入る、展望はないが気分はよい。最後の急坂ではかなりあえぎ、右手にロープウェイの白い建物が見え、やがてなだらかな明るいカヤの原に達し山頂に至る。夏の日差しが強いが風は心なしか秋を感じさせ

る。 一、二時二〇分山頂下の休憩所着。約束の二時までは時間もあまり十文字原からのパーティーはじめ、まだ誰も山頂には到着していないだろうとたかをくくり、だべっていたところ、上から声あり、かなりの人数がすでに山頂に到着しており、急ぎ山頂へ。一、二時四〇分山頂着。やや遅れて甲斐氏神社駐車場より到着、さらに遅れ最高齢者の橋本氏が約束の一二時きっかりに到着し予定の人員が全員そろふ。

正午、山頂にて別府湾リレー登山の成功を祝してセレモニー、梅木氏部長の挨拶、写真撮影など、総勢五〇名程度か。セレモニー後昼食、山頂にて解散。一

時往路を下山、途中かなりの雷雨となる。神社登山口に到着したときは全員ずぶぬれ。

鶴見岳には昭和三七年夏、学生時代学友四名と登って以来今回が二度目、ロープウェイなどでき何んとなく敬遠してきた。その時は午前中坊々つるから大船山に登り、寒の地獄に下山、バスで鳥居に出て今回と同じルートに登っているが、その時の記憶は全くない。ただ登山口の鳥居と山頂の三角点の位置だけはすぐに思い出した。当時ロープウェイなどはなく、市街地は近いがとてよい山だった記憶が残っている。下山後、志高湖まで歩き湖畔に設営、誰もいない静かな夜を過ごした。夏休みに入る前のウィークデーで誰もテントを張っている者もなく、思えば優雅な学生時代を過ごせたことがなつかしく思い出された。

一週間にわたるリレー登山は無事終了、関崎パーティーと亀崎パーティーが別府湾を囲む山稜のほぼ中央の鶴見岳に合流したことになる。計画最後である今回の登山も印象的であったが、担当した関崎での炎天下あるいは豪雨の中の二日間のルート工

作の苦勞が忘れられない。会員それぞれ担当部分のルート工作で苦勞したらしいが、これらの話しも聞きたいし、新しく作られたルートも是非歩いてみたいと考えている。

(一九九八、八、二三(日))

参加者 「おじか」より安部、

石川、甲斐(隆)、加藤、

白石、野村、林、松村

鳥居より菅(勲)

神社駐車場より甲斐(良)

木本(淳)、木本(義)

木本(礼)、橋本(祥)

リレー最終日の 山行報告II

十文字原から鶴見岳

安東 桂三

別府湾リレー登山も最終日。

国東半島コースの最終区間のラ

ンナー(?)は星子貞夫、飯田

勝之の二強と応援する安東桂三、

継松久美男、渡部昭三、大分山

の会会員四名の合計九名。七月

から始まったルート工作(藪漕

ぎ・ルート整備・テープ付け)

と八月一七日からの本リレーも

無事に終わり、本日、鶴見の山

頂に一二時に着けば、全てが終

わる。

AM六時に十文字原を出発す

れば、一二時には鶴見にゴール

出来ると算段していたが、星子

隊長の五時に出発しようという

意見で、急遽五時に出発する事

になった。

十文字原は未だ暗く、五時を過ぎてやつと薄明かりとなる。別府湾から速見、安心院へと雲と霧が懸かり、最終日の日の出は別府湾にかかる雲の上からであつた。十文字原の自衛隊演習地入口ゲートから、朝露の草花の尾根道を黙々と登る。標高八三〇メートルの高平山(ヒゲタ)

に登り着くと遠くにゴールの鶴見岳が見える。此の山はマイナーな為か、ワレモコウ、ヒゴタイやオオニユリが所々に咲いている。 約一時間歩いて、伽藍岳が大きく見える尾根上に着き、此処で休憩を取る。休憩中はこの「リレー登山」のルート工作の苦勞話に花が咲いた。「毎日のルート工作に、水を3リットルもって行った」とか、「魔へビに二回も同じ場所出会った」とか、「鋸山はもつとルート整備をしなれば、このままでは一般の人には大変だろう」とか。そして、「本日の小鹿コースはまだ出発していないだろう」と反対側のコースの事を思

つたりした。また、今日は朝早くかつた為、朝食を食べ損ねたメンバーが朝食を取ったりした。このコースは、既成ルートを通ると言うことで、今日まで一度も下見、ルート工作をしてなかつた。此処から狸峠を越えて塚原越までの約二キロメートルは、今日のヤマ場であり、これをどれくらい時間で踏査出来

るかで、鶴見山頂に時間通り(一二時)に着くことが出来るか否かが決まってしまう。早速、目の前の藪に取りかかる。狸峠迄はそれほどもなく、目の丈程のススキやカヤを漕いで下り着いた。この狸峠は塚原松塚と湯山の間の峠であり、道標があり、割りに人が往来した跡があり、しつかりした道であつた。しかしこれから行く塚原越方面には、やつと道が判る程度の道が有り、藪に覆われていた。星子隊長が先頭となり、イバラやススキを分けて進む。最初の一〇分程が苦勞する藪漕ぎであり、馬酔木の林に入ると問題無く進めた。結局四〇分で塚原越に到着する事が出来た。塚原越で大休止を取り、先が長いとの事で伽藍岳には飯田と安東が代表して登る事となり、後のメンバーは先を急ぐ。飯田と安東は伽藍岳の往復には三〇分を掛け、皆を追いかけた。

内山への登り道の所々にホトトギスが咲き、自然が残り感激させられた。しかし自然が残っていると言うことは、逆に考えると、人が入っていない事を意味する。内山の山頂が近づくと、またススキが繁り、登山道が隠れてしまう程で、内山から船底への下りは悪く足元が見えない程であつた。何人かはスリッパしながら、船底に到着する。この船底まで、朝出発してから四時間かかっている。後、ふ

た登り(鞍ガ戸の登りと鶴見岳の登り)でゴールだ。また大休止を取り、最後の登りの鋭気を養う。今日も気温は三〇度を越えているのだろう。この夏は毎日暑く、大分は気象観測始まって以来の酷暑となっている。また午後から雷が鳴る予定だと天気予報は言っていた。

鞍ガ戸の登りも前の内山と変わらず、スキの登り難い。皆、暑さと道の悪さの為に歩みが鈍くなってしまった。でも、もう一二時には鶴見岳に着く事が出来る射程内に入ったので、安心して登る。鞍ガ戸で最後の休憩を取る。

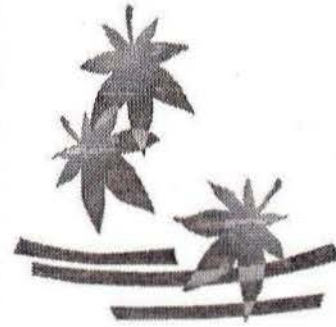
さあラストスパートだ。幾分歩き安くなった縦走路を飛ばす。鞍ガ戸の3峰、2峰、1峰と通り過ぎ、鶴見岳への最後の登りになる。計画では一二時丁度山頂到着の為に山頂手前で時間をつぶす予定であったが、上方から呼ぶ声があるので、登って行くと西さんと阿部さんであった。山頂手前で合流し、山頂へ向かう。

鶴見山頂到着一一時二〇分。本日の行動五時間五五分。『別府湾リレー登山』国東半島コース最終区間は終了した。万歳。(一九九八、八、二三(日))

コースタイム:十文字原発(5:53)ー休憩810(6:10)ピーク(6:33)ー6:40ー塚原越(7:21)ー7:30ー伽藍岳(7:45)ー塚原越(7:57)ー休

憩(8:27-8:34)ー内山(8:58-9:10)ー船底(9:25-9:44)ー鞍ガ戸(10:15-10:36)ー鶴見岳山頂(11:20)

参加者 安東、飯田、池辺、児玉、継松、星子、松井、渡辺、渡辺、西(孝)、阿部



無風、快晴、4℃

西 あずさ

八月一日、雨模様でツエルマツトに到着。翌日のプライベートホルンに登るための食料の買い出しに行く。

二日、天候は悪くないが、強風のためロープウェイが動かかない。プライベートホルン登山をあきらめ、仕方なく、米河の解けた水が浸食を繰り返してできた谷に降り、沢の兩岸のクライミングコースを楽しむ。マッターホルンは姿を見せない。ヘルンリヒュッテからの情報によると、

雪が降っているらしい。

三日、雪のため延期。通常、降雪の後は快晴が二日続かないとガイド協会はガイドを出さないそう。悔しい思いでガスに隠れたマッターホルンの方向を見ながら、ゴルナグラードからスネガまで約5時間のハイキングに出発。

四日、またもや延期。入山さえも、させてもらえない不安を抱えて、クラインマターホルンに上がり、ガスの切れ間から見え隠れするヘルンリヒュッテを眺める。望遠レンズで微かにソルベイ小屋が見える。夕方、マッターホルンがはじめて私たちの前に姿を現した。ガスの中からポーと白く無気味な姿だった。

五日、初めての青空。しかしマッターホルンのピークはガスの中。もう予備日はない。モンテローザに変更のプランも出される。九時半。ガイドから入山の連絡が入り、緊張感の中にもなごやかな昼食が取れた。シェワルツゼーでロープウェイを降り、二時間でヘルンリヒュッテに着く。途中、尾根に出ると真正面にマッターホルンが姿を現す。大きくこちらに襲いかかってくるように見える。夕食後、ガイドのフェリックスと装備点検。ピッケルは使わないと言う。ヘルメットにヘッドランプ、アイゼンはもちろんのこと、ウェアから、行動食にいたるまで点検する。

六日、三時半。パンとコーヒ

ーの朝食を取り出発。取り付きには早くも行列ができていく。いきなり人のいない左のルートを取る。上のソルベイ小屋まで、3時間で登らなければタイムオーバーで下ろされてしまう。ペースが気になるが、ガイドは上へ上へ高度を稼ぎ、話しかけるどころか、高度を感じる間もあちろん、ものを考えることすらできないペースで登っていく。休憩はしない。壁の前での順番待ちが唯一の休憩になるが、フェリックスは「レッツゴー」とコースを変えて、なおも登る。東壁側を巻くのにちよつとしたトラバースでも足元の下は、遙か彼方、暗闇の世界。

明るくなり始め、確保されながらの登攀が続く。ここがモズレイスラブと呼ばれるところで、ソルベイ小屋の横に出る。二時間半。やっと休憩できる。休憩している間もガイドと私をつなぐザイルは結ばれたまま。フェリックスの作ってくれたスペースシャルドリンクがおいしい。出発する頃に太陽が昇ってきた。ソルベイの上からは稜線にル

ートをとる。北壁を真横から見ることになる。ルートを見せてくれるが、じっくり見る余裕はない。約一時間で雪のためアイゼンを着ける。ザックがやっとなげけるほどのスペースがなくなり、片足を上げるにも集中力がある。綱引きに使うような太いファイ

クスロープが何か所もある。アイゼンの出っ歯だけで登るようなところも出てくる。フェリックスの足とザイルの伸びている方向しか見ることができず、心臓が口から出てしまいそうなほど早いペースで登っていく。

傾斜が緩やかになり、雪のたつぷり着いたところに出ると「お疲れさん」。一緒に参加した友人の声がする。八時半。ピークは余りにも突然だった。無風、快晴、4℃。フェリックスと握手。ありがたうという言葉しか思い浮かばない。ここで一枚の写真とともに記念撮影。この写真の人は、大学の先輩でマッターホルンに登るはずの夏の前に、五月、奥穂で亡くなった。せめて写真だけでもマッターホルンに連れて行って欲しいと送られてきたもの。「彼女とともにイタリア側のピークに行きたい」「OK、彼女のために行く」とフェリックスに私の想いが伝わり、イタリア側のピークへ向かう。

北壁側の一番てっぺん、切り立った雪稜を一五分。大きな十字架のあるイタリア側のピークに着く。ここでも先輩の写真とともに記念撮影をする。ピークに立ったという実感が湧いてきて涙が溢れた。

ここ数日の悪天を物語るかのよう、十字架には50センチを超える海老の尻尾ができていた。フェリックスはモンブラン

扇山と祇園山

(五月例会山行報告)

継松久美男

が見えると言うが、私にはどの山か分からない。足元にはイタリアの町が見える。
下りは私が先に歩く。まさに犬の散歩状態。アイゼンを外すまでは、引っかけないようにじゅうぶん注意をしながら下る。
懸垂下降するところはラクチン。ザイルを使った後の回収の速さがすごい。あつという間なので私にとっては休憩にもならない。ソルベイまで二時間で下り、ヘルンリまで二時間。最後の壁はギヤラリーが多いのでスマートに・・と思ったが、もうくたくた。「やったーッ」思わず声を上げてしまった。フェリックに抱きついて、しばらく涙が止まらない。「ブラボー」の声とともに拍手が聞こえる。下山してこんなに涙が出た山は今までにない。

五月九日午後八時に大分市を出発する。野津原町、朝地町を経て竹田市へ。竹田市から国道五七号を波野村へ。波野村から国道二六五号をひたすら南へ下り、高森町、蘇陽町、五ヶ瀬町をとり、椎葉村へたどり着く。秘境といわれる椎葉村も自動車であれば早いものだ。

椎葉村から林道をいく。林道はデコボコが少ないので普通車でもなんとか登っていきける。林道をかき上り扇山登山口にやると到着。時刻は午後一時三〇分。この日はここでピクニック。

翌朝五時出発。山の朝は早い。鳥のさえずりを聞きながら、新緑の山道を辿る。空気も清々しい。天候は曇天、しかしこれが幸いして暑い思いをせずにすんだ。六時二〇分山頂へ到着。山頂で万歳三唱、記念撮影をした。下りの林道では今日の山開きの準備に向かう自動車に何台も出会った。

本日二つめのピーク、五ヶ瀬町の祇園山へ向かう。祇園山も林道を相当上ったところが登山口であった。ここは西南の役ゆかりの地である。登山口に「西郷軍残壕跡」という標識があつた。



(扇山山頂にて)

た。取付きから急登であつたが、一気に登ってしまった。山頂ではまた万歳三唱、記念撮影をした。山頂に登山者のためのノートが置いてあつたので、これに記帳した。一時三〇分に祇園山登山口に戻り、ここで解散となった。

参加した皆さんの心がけが良かったためか、今回は雨にも降られず快適な山行であつた。
(一九九八、五、九、(土)
十(日))

参加者 阿部、安藤夫妻、飯田、石川、工藤、佐々木、高橋、継松、西、牧野

渡神岳外二山

(九月月例会山行報告)

安藤 幹

渡神岳(二一五〇米)高塚山(七二六、二米)鳥宿山(五四〇米)

午前五時サニー前出発、今日は津江三山の一つ渡神岳への月例山行である。大分自動車道を日田へ向かう。濃霧の十文字原を経て快調に日田インターへ、高速道を出た途端、佐藤氏の車が悪いがけないトラブル発生、已むを得ず佐藤氏リタイア。分乗し直して再出発。前津江村石建峠へ、いつもながら名ナビゲーター飯田氏の先導で七時半登山口着、今にも降り出しそうな空模様の中、雨具を着用出発する。しばらくは緩やかな歩き易い山道を進む。

トップの飯田氏に女性グループが続き、男性七名はスローペースで歩く。尾根筋から急登を一登りすると山頂である。三角点と石の祠があり権現社とのこと、神の山にふさわしいと思う。晴れていれば山群随一の眺めの山といわれるがあいにく何も見えない。ひと休みしてヤッホー三唱、八時三〇分下山開始、安部氏一足先に下ると言って縦走路の方向へ向かったので慌てて



(高塚山山頂にて)

大声で呼び戻す。
二つ目の山、高塚山へ移動、田頭部落から入山する。農家の庭先、石垣の下を通るが飼犬が喧しく吠える。林道沿いにはツリフネ草の大群落が広がり美しい。石川氏熱心に撮影する。山道に取りつき境界標を辿りながら登る。一行と離れた二人を探しに戻り、合流して山頂へ、一時五分立ったままの食事となる。相変わらず白一色で早々に下山となる。帰りは農家の庭先を歩くが犬が吠えない、異様な集団に恐れをなしたのかも？
時間があるので三つ目の山に登ることにして大山町の鳥宿山に向かう。「梅栗を植えてハワイへ行こう」をキャッチフレー

ズに取り組んだ大山町の梅林を初めて見る。手入れの行き届いた梅林が続く。曲がりくねった車道を登りつめると鳥宿神社の駐車場に着く。登山と言うよりお宮参りである。雨に濡れた石段を登り社殿で参拝し休憩中ドシャ降りの大雨となりしばらく雨やどりとなる。三角点を探すが、雨の中見つけられないまま下山。現地解散それぞれ帰途についた。一人では登れない山に山の仲間と一緒に登れる幸せに感謝している。

一九九八、九、二七(日)

同行者 安藤夫妻、安部、飯田、石川、岸本、木本、小竹、斉藤、佐藤、清水、西、牧野、松村、

貫山と足立山

(十月月例山行報告)

牧野信江

平成一〇年一〇月一八日(日) 曜)朝五時に、サニースポーツの前に集合し、田口さんの車で五人で出発しました。支部報のお知らせに、ザイル等お持ちの方はご持参くださいと書いてあったので内心少し不安でした。前日は時期はずれの台風十号が

一時間に六〇ミリの記録的な大雨を伴って、大分を通りました。当日は小雨が時々ぱらつきましたが、午後からは雨がやみました。平尾台は行橋から少し北西に入ったところですが、七時四〇分に峠(吹上峠)の駐車場より出発しました。(雨の後なので岩をとり止め、貫山に登ることになる。)カルスト台地で、なかなか草原の丘陵に白い楕円形のおわんをふせたような石灰岩が点在しています。遠くから見ると羊の群れのように見えます。貫山はそとで一番高い山です。地図がなく、ガスが晴れた時にやっと山が見えたので、少し速まきになりましたが九時三五分に頂上(七一二期)に着きました。見晴らしが良く、周防灘が見え、気持ち良かったです。行例の『万歳』をしました。三角点は、少し離れたところで飯田さんが見つけました。紫色のきれいな花が咲いていました。石川さんと田口さんは、よく写真をとられていました。頂上から足立山が良く見え、たので、次ぎはそこに行くことになりました。

足立山は北九州市にあります。九州百山の一つです。和気清麻路が道鏡に足の筋を切られ、山麓の泉で足の治療をしたら足が立ったことで山名がついたそうです。山麓に妙見神社があり、猪に乗った和気清麻路公の像があります。一二時四〇分に足立

公園登山口より登りました。階段の道なのできつかったです。小文字山という三百六十六米のピークでは小倉市街が足下に見えました。草地の防火帯を過ぎ最後のきつい登りを終え、午後三時に頂上(五九八米)に着きました。三角点の石がけずりといわれ表面がぎざぎざになっていました。三角点にストックをつき、西さんの音頭で恒例の「ヒヤッホー」で締めました。



(足立山山頂にて) またもとの登山口まで引き返す時間がかるので、妙見神社側におりにししました。西さんが頂上で会ったグループに田口さんを車まで乗せていってくださるよう頼みました。残った者は少しおくられて出発し、

午後四時三十分には神社に着きました。一時間ぐらい待っても田口さんは現れません。いろいろ気をもんでいると、さっきの小倉の四人のグループと田口さんがゴミ袋を手に現れました。こちらは先におりているとばかり思っていたのでびっくりしました。別のルートからゴミ集めをしながらおりにきたのでおそくなったのでした。照葉樹が茂って気持ちよかったです。企救自然歩道と書いてありました。皆で無事夜八時十分にサニースポーツ前に着きました。楽しい一日でした。

(一九九八、一〇、一(日))

参加者 飯田、石川、田口、西、牧野



JAC本部の齋藤厚生会長がかねてより本県の傾山に登って見たいという御意向であることを見聞き、会員上げて是非皆でお迎えしようということになり、去る十一月二十二日、支部月例山行を兼ねて皆で一緒に登ることとなった。当日は会長とともに登る同行された京都支部の酒井支部長や、会長と旧知の工藤医院(南大

分)の院長や別府中央病院の内田院長をはじめ、会員、会友合計三十一名が参加し、にぎやかな山行となった。また、下山後は三重町の『内山亭』で全員参加のもとに懇親会を開催し、なごやかな一時を過ごした。当日の山行報告を会友の林さんにお願した。

傾山へ

(十一月月例山行報告)

林 昭子

朝六時サニール出発、私は宮崎でひろってもらう。飯田氏の車で、梅木支部長と一緒に。ちよつぱり緊張。三重の内山観音前で一同下車。待ち合わせていた齋藤会長と初顔合わせで、梅木支部長より会長と酒井京都支部長の紹介があった。思ったより小さな方であった。私は大男の山男を連想していた。

総勢三十一名がそろい、車一台を連ねて再出発。道々紅葉も目につく。カーブを曲がったら目の前が真っ赤、演出効果ばつぐんである。何とも可愛らしい字目町のトトロのバス停を過ぎ、途中大明神越手前の杉ガ越展望所で小休憩後、一路の傾山の登山口(黒仁田)へ。



(九折越にて)

九時ごろ車到着順に順次登山開始、途中の水場で皆が揃うのを待つて再出発。九折越に十時過ぎに到着。天気は晴れ、気温六度、さすが十一月の傾山寒い。すこし早いがここで昼食。鉄砲でうったキジ飯を甲斐氏より御馳走になり満足。
 全員揃って記念写真撮影後、十時四十分出発。山頂の二つのごつごつとした岩肌、何度見てもすごい。また来れてことを感謝。九折越を出発して間もなく空が曇りだした。山頂にもガスがかかりだした。下山するまではどうぞ雨が降りませんようにと心で折る。寒い雪になるかも高度が上がるにつれ道の端にうすうすと雪が残っている。今朝

方にも降ったのだろう。霜柱もすごい。同行の小4年生の男の子元氣、走りまわっている。うらやましい。ゼイゼイ言いながら頑張る。

山頂の一〇分ほど手前で風を避け、後続の人たちを待つ。気温五度、全員揃って隊を整えて山頂へ。山頂は強風とガスの中だが何度きても感動。山頂での記念撮影は会の旗を出すのを忘れて二度写す。旗を持ってくるなど良く気のつく人だ。あずさん尊敬。

寒い山頂。一二時二〇分に下山開始。少ししぐれていたが天気は(降らずに)保っている。早く下山しよう。雨の中はつらい。九折越に一三時三〇分到着。後続の人を、おやつを食べながら待つ。山頂を見上げると先ほどまでとはうって変わって晴れ。通過したらしい前線がうらめしい。九折小屋に行つて見た。前回とは違い大変立派な小屋が建つていた。中も掃除がいきとどいてきれいだ。晴れた空に傾山の二つの岩峰がすばらしい。

一四時三〇分、九折越を出発し一五時一五分、駐車地点につく。後から下りてくる人たちを待つて発車。会食の場所「内山亭」を目指して出発。

会食は梅木氏部長、齋藤会長、京都支部長の挨拶のあと乾杯。二〇〇〇年に大分で開く予定の支部四〇周年記念と全国支部懇談会に大いに期待。

会長から良い山行だったと喜んでもらえた。二〇〇〇年には私も何かの形で参加させてもらおう。会長さし入れのブランドなど飲みながら思う、幸せ。

(一九九八、一一、二二)

(日)

参加者 齊藤会長、酒井支部長、工藤院長、梅木支部長、内田、相野、阿部、安藤夫妻、飯田、石川、小幡、甲斐、木本夫妻、木本(礼)木本(淳)、吉良、小竹、佐藤、首藤、高木、高橋、田口、土居、西(あ)、野上夫妻、林、星子、山崎、渡辺、



第一五回全国支部懇談会報告

西 孝子

九月一九日大分空港八時二五分発、羽田十時五五分、秋田一二時着、JR秋田駅発一二時四五分、男鹿駅よりバスで北浦

門前へ、さらに磯乃家族館へと阿部和代会員と二人。支部長二十四名、百六十五名の会員参加午後四時より支部連絡会議、六時より懇親会、一部屋に並んだお膳の間に人が小さくなり、通路などなし。秋田の会長挨拶、秋田の歌、なまはげと記念写真。動けない、足は痛し。山盛りのごちそうに驚く。この主人が市観光協会副会長。市のおえらいさんの挨拶が続く。

道の横は海だが静か。九州からの移動でぐすすり。九月二〇日、なまはげの写真九百円を朝食の前に買う。和代さん「あのせまい所を一人ずつ写したはず。」と。朝食後遊覧船で戸賀まで半島の奇岩を海より観賞。これより真山神社までバスで四十分、男鹿三山お山がけ入口で、神主の話と又ここでなまはげ数人が出て皆を驚かす。真山は天然秋田杉が茂る秋田藩御用林で、これを急登とまき道がある。二度と来ないだろうと急登を選び、雨の中を一等三角点(航空自衛隊リーダー基地)七一五、二〇へ。自衛隊員が三角点の所について、基地の方向を写さぬように注意される。

町より道がつけてあり、食事も隊の中で秋田名物の汁をよばれ、ここより毛無山へ行かず、特別に男鹿駅まで送ってもらう。雨もやみ、夕焼けの鳥海山を眺める事が出来た。車止めより滝の小屋へ三十分歩く。二〇時に寝るが、小屋番と一人の登山者だけで静かである。二一日三時起床、出発三時四五分、星が美しく、沢を渡り、踏みあとを見ながら三〇分ほど行つた頃、小屋番の人が来た。阿部さんの驚くこと。小屋の前に「あやしい登山者に注意」とあつた事を思い出したらしい。七〇歳を過ぎて足どりかろく、「水くみに行つたと思つていたら、帰つて来ないので心配して登山道を教えに来た。」と。女二人夜道を進むなどあまりないのだろう。

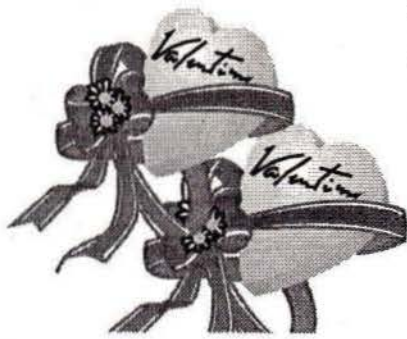
河原宿小屋より山頂火口壁までは、急登で、星空から朝やけと変わる様は、何時も云い様のない味わいである。風が強くなり、山頂小屋に用のあるヘリコプターが何回か来たが、着地出来ずに帰つて行つた。七高山頂九時二七分、風まかせで、火口壁をよたよたと歩き、下りかけた頃、登山者四、五人グループに二回程あつただけで、十時すぎには山頂はガスをかぶつて見えなない。二人で運のよさをよるこび、滝の小屋へ。ここでタクシーを呼んでもらい車止めへ。小雨が降り始める。

この山は登るより見る山だと話しながら、夕焼けの中に浮かぶ鳥海山を想い、次は月山へとタクシーに乗る。酒田より月山口へバスで。雨ひどし。清水屋に泊まる。台風八号で天気悪し。二二日、山は

セピア色の秘境

飯田勝之

あきらめ山形市で済生館、山形城内博物館と三十五度の城内を見学。ホテルより旅館にし、午後九時台風を見送り、二三日、阿部さんは東京へ、私は福島で分かれてそれより東吾妻へ。一二時四五分出発。タクシーを待たせ（スカイライン）雨の中、地図をたよりに、大木の根、木道。山頂で万歳、ヤッホーで、四時半タクシーへ。パトロールの人が「もう三時半過ぎると山は暗いと心配していた。」と。野地温泉泊。相模屋。日本山岳会員の会旗に寄せ書きがあったので、主に、二万五千の地図を見せ安達太良山の事を聞こうとしたが、私のようなばあには取りあわず、そのまましつぱを巻き部屋でのんびり。



七号台風を気にし、東京で遊ぶ。二万五千の地図三一枚をたつた一五枚、四山で台風がらみの旅をおえる。

私は先日約三十年ぶりに宮崎県椎葉村の尾前というところを訪れた。銚子傘という宮崎・熊本県境にある秘境の山に登ったあとの帰り道のことである。翌日の山行の基地に着くまでに間に余裕があるので、ふと思いついて昔の思い出の地を訪ねたのである。訪ねたと行っても車で少し寄り道しただけであるが、かねてより、心の奥底に色濃く残っていた思い出、今一度機会があれば訪ねて見たいと思っていた気持ちに誘われてハンドゥルを切ったところである。

霧立越や国見岳の話題が出る度に私の脳裏にはかつて山旅の途中で泊まったこの山奥の小さな町のこと浮かんでくる。初めて訪れた秘境椎葉のその最奥の町は、当時の私に深い印象を残していたのだ。

県境の不土野峠から下ってきた道は椎葉ダムの湖水が見えるところまでくると、上流から来た道と出会う。この出会いを入れてわずかに八キロ足らずのところ尾前の集落がある。しかし私が訪れた五月の明るい日ざしに包まれた狭い谷あいの集落は、昔の山深い奥地のほのぐらい印象とはずいぶんと違っていた。あの時はもつと家並も多く、

町が大きく感じられた。人の往来も多かった。それでもうっそうたる山々の木立や深い谷あいの町にはそこはかとなく秘境のイメージが漂っていた。三十八年ぶりに見る尾前の光景からは私の脳裏にあつたむかしそのイメージがよみがえってこない。家に帰って私は古い日記を引っぱり出してみた。当時私は大分県内か県外のごく近くの山しか経験がなく、九州脊梁山地と霧立越というロマンに満ちた名の山にひそかな憧れを持っていた。友人のY君と二人の間で霧立越と向霧立越を縦走して見ようじやないかという計画が一致してある日、延岡駅前からバスに乗り高千穂に向かったのはもう年の瀬に近い、曇った寒い日であった。

高千穂でバスに乗換え、目指すところは本屋敷というバスの終点。高千穂から谷あいの道や大きな峠道を越え、一旦バスは熊本県に入り、馬見原という町を通り、再び宮崎県に戻って鞍岡という町を過ぎて終点の本屋敷という小さな町に着いた時刻にはもう短い冬の日の太陽は西の高い山に隠れていた。

バスの終点からは小さな車やバスが通るくらい細い砂利道を、学校から帰るところだと言う小学六年生の男の子と一緒に谷川に沿って登っていった。やがて棚田の向こうに民家が見え始めた。そこがその夜の泊まり場所、波帰の部落である。背後に高い山々を背負った、山の斜面に民家がへばりつくように点在する集落の入り口に公民館が建っていた。今夜はそこに泊めてもらうのだ。部落の中に入り、区長さんの家を教えてもらって公民館の鍵を借りたのを思い出す。

次の日は、波帰の集落の中を抜け、谷沿いの道を登ってカシバル峠につき、さらに登りつめて杉ガ越まで登ると、そこに荷物をおいて霧立越の最高峰、向坂山に登った。引き返すと白岩の頭に登り、水呑ノ頭へと登った。当時、水呑ノ頭は完全な藪の中、スズタケの中に細く踏み分けのあるのを辿って辛うじて頂上地点を見つけ出したものだ。その後は灰ノ木の頭で弁当を開き、霧立越ののんびりした縦走を楽しみつつ、途中からコヤンバ谷に下る道をとつたが、下る途中の道はいたる所で伐採が進められており、耳川源流の谷を隔てた向霧立越の山々の斜面も同様に伐採が進んでいるのが目についた。それでも当時の写真を見ると、国見岳の山腹はほとんど手つかずで、今日のように無惨に伐採、造林されて谷と稜線のみがまるで田圃の畦道のように残されている光景は見あたらない。

コヤンバ谷への長い下りにはへとへとになり、下り終えた時にはもう歩くのも嫌だという気持ちであった。でもまだそこから宿の有る尾前まで約一時間歩かなければならない。二人してトポトポ歩いていたらおり良く、山仕事を終えたトバックが通りかかり、乗っていないかとか声がかった。小踊りしてザックを後の荷台に放り込み、そして二人とも荷台に飛び乗った。

しばらくして尾前に着いた。夜は尾前で2軒ある旅館のうち、の国富旅館という宿に泊まった。宿は、いわゆる木賃宿風で記憶に残っているのは気のない親父さんのお話と、空腹で何度もお代わりした晩御飯を快く応じてくれたことと、Y君と入った五右衛門風呂だ。

町はこの山深い秘境にしては意外なほど活気が感じられた。夕暮れ近い町の中には人の往来もかなり有った。宿の近くにはバスの車庫が有り、夕方着いた最終便は沢山の人を降ろして車庫に入った。

翌日は国見岳へ登るのだが、前日波帰で使ったシユラフやコツフェル、ラジュースなどを宿に預けてのスタートで、朝一番に奥の境谷という集落に向けて発つバスに乗り国見岳登り口のバス停で降りた。

登山口からいきなりの急登が続くその道は雷坂という恐ろしい名前だが、延々と続く登りはそれはきついもので、まさに坂の名前の由来を彷彿とさせる坂

であった。

二時間以上の延々とした登りの後、巨大なブナなどが点在する原生林の中の緩やかな山道となり、そこいらがヘラノ木平というところだった。雷坂は途中が伐採地であったりして所々が歩きにくいところも有ったように思うが、原生林の中に入ると非常に良く手入れされた感じの良い山道で、人の往来が結構多いことがしのばれた。

しかし、雷坂らしい一人の人影も見ることがなかったのはやはり九州脊梁の山奥だと思つた。再び登りがきつくなつた頃、空が次第にあやしくなつてきた。

雨が降りだす前に食事を済ませておこうということにし、お昼にまだ時間が有つたが弁当を開き、再び登り始めた。頂上の手前でとうとう降り出し、小粒の雨の中、ヤツケを羽織つて登つていく。頂上が近くなると完全にガスの中となつた。シャクナゲや馬酔木の間のガスの中にポーツと社が浮かんだとき、頂上が目の前に来たのを知つた。一旦下つて登り着いた頂上はあたり一面が霧に包まれて展望はまったくきかなかつた。大した雨ではなかつた。山頂標識をバックに撮つたその時の記念写真には何故か大きなサルノコシカケを持って写っている。

小国見のピークを越し、冷たい初冬の小雨の向霧立縦走路をとぼとぼと歩いたのを思い出す。

雨は本降りにならず、上がらずいつまでも続いた。

五勇岳の展望台からは小雨に煙る烏帽子岳や時雨岳が遠く望まれた。五勇からは石堂屋の尾根を経ての長い長い下りであった。何時止むともなしの小雨の中、二人はただ黙々と下つたものだ。

ようやく民家が見え、日当の部落を過ぎ尾前に着いたときは本当に嬉しかつた。ピニロン帆布のヤツケを通して中まで濡れており、宿に預けておいた荷物の中から昨夜着替えた下着を取り出して着替えた。

尾前から椎葉行きのバスに乗り、終点の上椎葉で宿をとつたが、ここは秘境の村のイメージとはほど遠い、意外と賑やかな街の雰囲気に驚いたのを思い出す。翌日は鶴富屋敷などをみてバスで日向市へと出て、さらに国鉄に乗り換えて帰つた。

それから二十年ほど後に私は小川岳に登るため、二度目に波帰を訪れたことがある。その時は部落の上の方ではスキー場の工事が始まっていた。家々のたずまいや集落の雰囲気は昔の面影を残し、あの夕暮れ迫る寒村の風景がモノトーンの色褪せた写真のように頭に浮かんできが、通り過ぎるトラックと稜線のスキー場工事の様子が私の波帰に対する思い出をぶち壊した。尾前を訪れて、ぼんやりと思いつく三八前の霧立縦走の思い

出と尾前の古びた思い出。(実は三年前、我が支部の月例山行で烏帽子岳と白鳥山に登つた時の帰途、椎葉越から下つて近くを通つたことがあり、その時、ちよつと寄つてみたいという思いが沸き、口まで出かけたが、レンタカーに六人同乗というなかで言葉を飲み込んだことがある。)

それは断片的でちぐはぐな中に切り貼りだらけの中のおぼろげなものであるが、三八年たつて、街というほどもない家並の中を歩いて見ると、頭に思い浮かべて見る昔の光景とはまったくかけ離れている。

めまぐるしく変遷する時代の中で、尾前だけが昔のままでありれと思うのは旅人の独りよがりな郷愁でしかすぎないのだ。それが分かつているだけに、古い思い出に残るセピア色のモノトーンの尾前はやっぱり私の頭の中に残しておくだけにして再び訪れるのではなかつた。

(一九九八年六月)



伝言板

お知らせ

一二月月例山行の

ご案内

日時 一二月二三日(日)

午前五時サニ一出発

場所 樋桶山(八七〇m)

(耶馬溪町)

雨天決行

時間があつたら近くの山に行きます。

前日の連絡は車の手配ができませんので、参加の方は四日前までに事務局にご連絡ください。

後記

○ 齊藤会長をお迎えしての傾山山行はたくさんの方々が参

加して、かつてない大にぎわいの月例山行でした。
○ 下山後の「内山亭」での懇親会も大盛況でした。
○ 今年は紅葉が遅くなり、色づきも今ひとつという感じでしたが、最近ようやくやくあざやかな赤い色が、色づき始めた木々の中に目立つようになりました。

日本山岳会東九州支部報 第4号

1998年(平成10年)12月1日

発行者 梅木秀徳

編集者 飯田勝之

発行所 〒870-0021

大分市府内町1-3-16

サニースポーツ内 西 孝子方

TEL・FAX 097-532-0926

題字 佐藤正八